

日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集

編集人 辻裕史
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8階 (〒100-0011)
電話 (03) 3503-3829
FAX (03) 3503-3828
<http://www.conpt.jp>

CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.37 No.6
2013.12.1
会報 (通巻 222 号)

日本新聞製作技術懇話会
会報 (隔月刊)
(禁転載)



目次

CONPT-TOUR2013の足跡	3
朝日新聞社 製作本部生産管理部	瀧崎 秀憲 4
(株)朝日プリンテック 名古屋工場製作部リーダー	石川 雅一 4
共同通信社 経営企画室委員	黒澤 勇 5
信濃毎日新聞社 技術局技術開発部	養田 孝 6
中日新聞北陸本社 技術局長	榎本 衆 7
日本経済新聞社 製作局製作委託部技術担当部長	川内 圭介 8
(株)日経東京製作センター 東雲工場輸送管理部部長	岡村 洋一 9
(株)日経西日本製作センター 西部工場製作部長	山田 周治 10
読売新聞東京本社 制作局技術二部次長	武田 臣司 11
日本新聞協会 編集制作部技術・通信担当主管	藤高 伊都 12
西研グラフィックス(株) 東京支社課長	小池 享 13
第一工業(株) 大阪支店搬送システム部部長	伊達 泰敬 14
DIC グラフィックス(株) 新聞インキ事業部関西新聞第一営業部関西第一担当課長	宮口 定伸 15
(株)東京機械製作所 第二事業部デジタル事業グループ課長	青山 浩士 16
(株)東京機械製作所 第一事業部オフ輪事業グループ営業係長	安部 史郎 17
東洋インキ(株) 新聞販売統括部販売部第一課課長補佐	梅田 賢二 18
富士通(株) 社会基盤システム事業本部メディアシステム事業部	田淵 晃一 19
富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ(株) 新聞営業部販売一課	山本大一郎 20
富士薬品工業(株) 大阪営業所営業部長	森島 徹 20
三菱重工印刷紙工機械(株) 営業統括部長	内生 孝史 21
写真に見るツアー点描	23
楽事万歳	
山梨日日新聞社 新聞印刷センター次長	中村 正 24
クオード・テック・インク日本支店 営業課長	三木 幸一 25
会員社レポート	
明和ゴム工業(株)、日本新聞インキ(株) 26
コニカミノルタビジネスソリューションズ(株)、(株)KKS 27
米国PRINT13とNewsweb社にみるデジタル印刷の最新トレンド	
(有)メディアテクノス 代表取締役	井上 秋男 28
第111回技術懇談会記	31
第66回新聞大会開く	31
第112回技術懇談会記	31
会員消息他	32

- 表紙写真提供：「CONPT TOUR 2013 入選作より」
日本経済新聞社・川内 圭介氏
「ベルリンの壁の前広場」
- 表紙製版：(株)デイリースポーツプレスセンター
- 組版・印刷：(株)デイリースポーツプレスセンター

CONPT TOUR2013の足跡

～欧州最新デジタル事情を見た聞いた～

World Publishing Expo2013 (WPE) 見学を主目的に欧州の最新デジタル事情を視察する第38回CONPT-TOURは、10月6日に(日)成田を出発、ベルリン、ロンドンでの5泊7日の日程を消化し同12日(土)に帰国しました。ツアーは総勢31名(新聞社関係12社12名、会員社13社15名、事務員2名、添乗員1名)と昨年のツアー (drupa)に続き30人超え。

WPEと名称が変わったことと、上流下流ともデジタルに大きく軸足を移す欧州新聞界の現状を映し、実機展示がない若干さびしいエキスポであったといえます。WPEが来年以降どうなるのかちょっと気になる今回でした。IFRAのワーフェルさんは今年もCONPT向けのセミナーを開いてくれ、マルチチャンネル広告の重要性を訴えたほか、新聞製作には再び発明が必要と述べました。デジタル専門家による特別セミナー(受講料は大変高価)もIFRAの好意で全員無料でした。

*

アクセルシュプリングァー (Axel)・シュパンダウ工場では、デジタル機によるハイブリット印刷を見ました。Webサイトへのパスワードを10センチ幅で追加印刷する形ながらデジタル機が活用されていました。ニュースUK工場でもロト籤の連番号をフロント面に追加印刷する実用例を見ました。STROMA社では、読売新聞の国際版印刷を見学。オセの初期機で後処理はフンケラーの機械を使う方式でしたが、小ロット多品目の新聞印刷の実際を見ることができたのは収穫でした。シュパンダウ工場、ニュースUK工場に共通するのは規模の大きさです。特にUKは敷地4万9千坪に広大な建屋があり12セットが稼働する壮観さでした。

3年前と同様Axel社本社を訪ね、ビルト紙と同オンラインのその後の状況を聞きました。今年上期にはデジタル事業が新聞の収益を上回ったということ。デジタル広告の価値を高め、さらに増収を目指す姿勢が見て取れました。マードック傘下のニュースUK本社ではデジタル印刷(ロト籤番号)をテコに大衆紙サンの増紙を図っていました。

*

訪問先の随所で心のこもった応対と丁寧な説明を受けました。IFRAからはランチをご馳走になり、UK工場でのランチにはお鮎まで用意していて、ちょっと驚きでした。旅行中の食事も、ホテルの朝食、パブでの夕食もまずまず。ただ日程は、円安の影響で費用節減のため1日短借しタイトだったのは否めません。現地研修会は講師が「まとめ」を完成させる時間がなく、一部ヒヤリング形式となりましたが、これも全員参加型の新しい方式として定着するかもしれません。講師の黒澤さん(共同)、加藤さん(日経)、青山さん(東機)にはご苦勞をかけました。毎夜部屋で談話スナックを開いてくれた内生団長ともども御礼を申し上げます。会の名称は「セルジオ会」。ベルリンの旅行社の案内役がサッカー解説のセルジオ越後さんに酷似していたのが由来です。(事務局)

CONPT TOUR 2013視察日程

10月6日(日)	東京発 ベルリン着
10月7日(月)	WPE展、IFRAセミナー
10月8日(火)	アクセル・シュプリングァー・シュパンダウ工場、本社視察
10月9日(水)	ベルリン発 ロンドン着 ストローマ社見学
10月10日(木)	ニュースUK 工場・本社見学、研修会、さよならパーティー
10月11日(金)	ロンドン発
10月12日(土)	帰国

地球の反対側

朝日新聞社 製作本部生産管理部

瀧崎 秀憲

「子午線を跨いでるぞお」ロンドン郊外にあるグリニッジ天文台を訪れた。基準である本館の窓の中央から延びる本初子午線が地面に引かれている。地球を140°回ってきたんだ、飛行機に12時間乗ってきたもんなあなどと感慨に浸った。そして天文台のある丘の上からの眺めは素晴らしかった。眼下に芝の緑が広がり、テムズ川の向こうにロンドンの街を一望できた。



グリニッジの丘からの眺め

ツアーでは驚きと興奮の連続だった。工場の廊下の直線距離が200m！インサータと先刷りされた巨大なロールが立ち並ぶ発送場に圧倒され、ブロード120頁、6セクションを印刷できる輪転機にも面食らった。

向こうで視察を進めていく中で感じたことは、日本の特殊性だった。宅配制度のありがたさを再認識したと同時に、その画一したシステムが印刷工場を大差ないものにしていても感じた。また、欧州の中で品質にも自信を持つ工場の見学だったが、紙面品質へのこだわりは間違いなく日本の方が上だった。日本の新聞は独自の道を進化させてきたのだと実感した。

* * *

一方、今回のツアーの目玉であったデジタル印刷には、残念ながら新しいものは見いだ

せなかった。そこにあったのは継続して試行錯誤している姿である。ただ、欧州を代表するメディアがチャレンジする姿勢には、他をリードしていくという自負を感じた。デジタル印刷を今後どのように展開できるか、特に日本という国の構造、文化の中でどのようなビジネスモデルが成り立ち得るか、今まさに動き出したところとの意を強くした。

* * *

地球の反対側には新鮮な発見がいっぱいあった。短い期間ではあったが、日本という枠組みの中で凝り固まった思考を壊すには十分な時間だった。今後広い視野で新聞に付加価値をつけることを考えていきたい。

最後に、同行させていただいた方々のおかげで楽しく過ごすことができました。皆様にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

最年少・松坂世代

㈱朝日プリンテック 名古屋工場
製作部・リーダー

石川 雅一

今回、CONPT TOURに参加させてもらう事になり、名簿を拝見した時点で青ざめました。各社の役職をみると偉い方が多く、私の人選を弊社は間違えたのではないかと…。不安だらけで旅行説明会に臨んだのを思い出します。いざ、自己紹介の場では他に売りがなかったもので、元気と若さのみをアピールし挨拶しました。その後、懇親会の場で年の話しになると私を含め、松坂世代が3名もみえた事に胸をなで下ろしました。さらに、今回ツアーに参加する中で一番若い3名という事も分かり、安心とともに足を引っ張らないようにしなくてはと不安にもなりました。

* * *

いざ、視察が始まると、皆様からお声をかけて頂き、本当に有意義に、楽しく視察を終える事ができました。改めて、ご配慮頂いた

人生の先輩方、ありがとうございました。

今回、参加させて頂いて強く感じたのは、新聞業界があるのは支えてきて下さった各方面の先輩方をおかげだと思ったのと同時に、新聞を取り巻く環境はかなりきびしくもなってきたのは日本に限らず、世界共通だという事でした。我々、松坂世代も新聞業界によりかかるだけではなく、業界を支える立場になっていかななくてはいけないと思います。これは私の決意表明です。(すでに私以外の2名の松坂世代の方は支えています。)



グリニッジ天文台にある
グリニッジ平均時を表す時計

今回、このツアーへの参加を初めて上司から聞かされた時は、断れるなら断ろうとした事が恥ずかしく、今はまたこのような機会があればひと参加したいと思える視察でした。

* * *

今回のツアーを振り返って、一番大きかったのは人との交流でした。普段、お会いできない他の新聞社関係の方、パートナーの方々とお会いでき、お話しできた事です。これが私にとって一番の財産になりました。

参加された皆様、幾多の失礼があったであろうと思います。若輩者の私でしたが寛大な心で接して頂きありがとうございました。

今後とも、「セルジオ会」の一員としてどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

新しいデジタルの波？

共同通信社
経営企画室委員

黒澤 勇

今回のTOURは弾丸ツアーで、成田空港集合時間もいつもより2時間近く早かった。その後ロンドンを経由し、ベルリンに向かう14時間近いフライトを経て目的地に到着。TOUR参加者からも「ふう〜」という安ど感が漂った。現地到着後は、目まぐるしく視察が予定されており、いつもより2か所の国のロケーションを視察するには相当厳しいスケジュールだったのは間違いない。

しかし、今回団長を務められた内生さんをはじめTOUR参加者はひとりも健康などを崩すこともなく、無事視察が完了したのは参加者の皆さんの意気込みが強かったものと確信しております。

* * *

昨年から展示会名を「World Publishing Expo」にした会場を視察した。初日前半は、WAN-IFRAセミナーを受講、後半は会場内重要ブース視察など丸一日会場内ツアーを実施した。来場者は3日間でのべ8,500人で昨年より増加した。



WPE会場・メッセベルリン

会場内ツアーも弾丸ツアーのように数十か所を一気にまわっていくなど広い展示会場を端から端まで視察を実施した。

WAN-IFRAから説明があったブースを改めて視察をすると展示方法が今までと違い、ハードウェアを展示し、目の前で動きを見せることからパソコンとモニターを使った説明、提案方式に変わっており、ほぼどこのブースも「デジタル」を主流に説明をしていた。昨年より更にデジタルの波がきていると感じたしだいだ。

* * *

続いて、WAN-IFRA説明の中で多くの事例を紹介されたアクセル・シュプリング社を訪問した。

今年に入り、デジタル収益が大幅に向上し、紙の収益を超えたという報道もあったが、訪問した時間も夕方ということで聞きたいことがあまり聞けない状況になったが、3年前訪問した時より、デジタルを大幅に推進していることが肌感覚で感じ取られた。

今回は皆様が視察状況を記載していただけることを期待し、最後にコメントしたい。

今回のツアーでは、ご一緒させていただきました強者の皆様にはこの場を借りて感謝したい。

最後にTOUR参加の皆様にありがとうございました。

デジタル化雑観

信濃毎日新聞社 技術局技術開発部

養田 孝

ツアー最終日の自由視察、思い切って一人ロンドンの街に繰り出してみる。午前8時半、うっすらとかすみがあった街並みが秋の日差しを反射する。映画の中にでも入り込んだかのような美しい景色だ。往路の飛行機内で007を見たからだろうか。フォートナム&メイソンで紅茶を購入する任務もあった。気分はジェームズ・ボンド。少数派だとは思いますがショーン・コネリーより広川太一郎のロジャー・ムーアが好みだ。

ホテル最寄りのベイカー・ストリート駅から地下鉄に乗る。朝のジュビリーラインは通勤時間帯と重なったためかそれなりに混雑している。自分のスペースを確保してまわりを見まわすと新聞を読んでいる人がちらほら目に入ってきた。「あれは何の新聞だろう」「若い人も結構読んでいるな」などと考えているうちに次のボンド・ストリート駅に到着。出入口に近いところに立っていたため一度下車。再乗車の一団に続いて乗り込む。すると、今度はスマホのゲームに興じる3人に囲まれていることに気づいた。たまたまだろうと思うが、3人とも升目の中のカラフルなおセロ石を動かすパズルゲームのようなものをしていいる。この人たちにゲームより魅力的なコンテンツを提供できないと…。手ごわいライバルだ。

* * *

今回の視察で上流工程と言える分野は全体の2割程度といったところだろうか。「現在の新聞技術の縮図」と言ったら大げさかもしれないが、デジタル印刷機というビッグネームの存在がツアー全体にも強く影響していたように思う。

World Publishing Expoでは、あらためてフロア図を見るとソフトウェア系のある一区画にまるまる行ってないと思われることに後から気づいた。団体行動が前提で、時間もあまりなかったが、もう少し自分で動いてみてよかったかなとも思う。

アクセル・シュプリング社でビルト紙の記者に「システムはよく知らない」と言われたときには目の前が暗くなった。Conptの事務局にシステム担当の方を必ず同席してもらうようお願いするとか、訪問前に質問事項を渡しておくといった準備をしておけばよかったなど今になれば思うが、事前にそこまで推測するのはなかなか難しい。

* * *

欧州新聞社のデジタル化への取り組みその

ものはもちろん評価するが、少しデジタル偏重というか、ネットでの課金モデルに傾斜しすぎているようなさらいを感じた。信濃毎日新聞社の社是の一つに「郷土に立脚、産業文化の興隆を期す」というのがあがるが、もう少しこういった感覚を大切にしたいと思う。どうも紙かデジタルかという二項対立な話になってしまいがちなのが気になる。

懐具合は厳しいのかもしれないが、もう少し「武士は食わねど高ようじ」とでもいうか、紙面そのもので奮闘している勇姿とアイデアを見たかった。このあたり、いい悪いは別として、紙面でさまざまな形態に挑戦している広告分野の方に好感を持つ。

とはいえ、視察そのものはたいへん勉強になり、よい経験をさせていただいたという思いで一杯だ。普段お付き合いのあまりない下流工程のメーカーの方からは、基本的なことも丁寧に教えていただいた。皆さんの熱意をもって新聞の発行ができていくということ再認識させられ、新聞社の人間として感謝の念に堪えない。

「壁」との出会い

中日新聞北陸本社 技術局長

榎本 衆

養老孟司さんに「バカの壁」という著書がある。人間は結局、自分の脳に入ることしか理解できない。個々人に応じた理解があることを知るのが大切だと趣旨だったと思う。だから今回の視察は自分の頭にある「デジタルの壁」を崩せるかが大きなテーマだった。

結論から先に言うと、依然としてモヤモヤは残ったままだ。Axel Springer、New UK 両社とも海図のない航海に出たのではないかと。

確かに部数は減り続け広告も不振な中で、ともにデジタル事業に活路を見いだそうとし、そのためにデジタル印刷技術を使おうと

いう発想は素晴らしく、既成概念からは生まれられないと思う。しかし、失礼ながらそのためのインクジェット装置への投資というなら、いささか巨額すぎるのでは、という思いは拭えない。

両社ともオンラインとの融合や新たな広告モデル、マイクロゾーニング(地域細分化配布)といった構想はあるようだ。説明で強調されていたように効果を確認しながら、徐々に活用法を探っていくのだろう。即売が大半のビルトやサンにとって、無名の読者を属性が分かる「顧客」に変えていくことも大きな意味を持つ。ただ日本の場合、宅配という販売システムは少なくとも販売店による読者の属性把握やゾーニングを内包している。ウェブもサッカーのようなキラーコンテンツを求めるとはなかなか厳しいだろう。

* * *

どうも私の中の「バカの壁」を崩すのは容易ではない。しかし、今ツアーで出会った二つの「壁」は示唆的だった。

一つは「ベルリンの壁」(正確には壁の痕跡)だ。今や路上の一本の筋と一部に残る壁は観光名所だ。しかしその傍らには西側に逃れようとして命を落とした東ベルリン市民の慰霊モニュメントが建つ。永久に無くならないと信じたからこそ命がけて壁を越えようとしたのだろう。しかし壁は崩れた。

もう一つは「ペイウオール」。無料の世界に壁を築き「デジタルコンテンツは有料」との信念を貫こうとしている。しかし、そのためにインクジェット印刷の活用などテクノロジーの壁にはこだわらない。パラダイムシフトは起きるのだ。

今やグーグルが自動運転車計画を発表する時代。ベルリンのWPEでも異分野や新興企業の展示も目立った。旧来の発想では生き残れないとの認識は共通している。もう「バカの壁」などと開き直ってはいられない。知恵が試されるのだと痛感した1週間だった。

最後までハラハラ、ドキドキ

日本経済新聞社 製作局製作委託部
技術担当部長

川内 圭介

私のCONPT-TOURは、8月も終わる頃、CONPT事務局から届いていた封書を局次長から渡され、「CONPT-TOURへ行ってくれ」の一言で始まった。今までのCONPT-TOURは、他部署から参加することが多かったのですが、最初、「えー、俺が？」と耳を疑った。しかも、「申し込みの締め切りは、すでに(3週間前に)終わっているのだから、すぐにCONPT事務局へ連絡を取ってくれ」とも。このときから、今回のツアーは、慌しい雰囲気があったのだ。海外出張のときはいつもハラハラドキドキ、ブルーな気持ちになる。

数日後、CONPT事務局の徳永マネージャーから「出張期間中の研修会報告と帰国報告会をやってくれ」と依頼され、日本新聞協会からも『新聞技術』への執筆依頼があり、さらにブルーな気持ちが強くなった。

* * *

出発の当日、お腹の具合が珍しくおかしい。成田空港に着くと、慌ててトイレに駆け込む。「うーん、やっぱり、まずい・・・。」こんな悪コンディションで12時間以上のフライトに耐えられるのか？しかし、こんな心配も最初だけ。軽食を含む機内食は完食し、ワインやビールを飲み、エコノミークラスの狭い座席にも耐え、最初の訪問地ベルリンに到着した。

前日の寝不足と時差ボケで頭がぼーとしたまま、私の視察が始まった。英語の出来ない私は、通訳の横にピッタリと寄り添いながら、次から次へと視察先を回った。

* * *

慌しい各社の視察と研修会が終わったツアー最終日。ロンドン市内の半日観光やお土産購入も慌しく終え、「あとは空港でちょっとしたお土産を買って帰るだけだな」と思った

が、今回のツアーはそんなに甘くない。

バスでヒースロー空港へ向かったが、深刻な大渋滞である。事故もあったようだが、その渋滞は半端じゃない。バスのドライバーも今までの経験と勘を頼りに抜け道へ逃げ込むが、どの道も混んでいる。車中では「こりゃ、ダメだな」とあきらめの声も漏れ始めた。

土地勘のない私は、バスがどこをどう走ったか全くわからないが、しばらくすると、空港の標識が見えてきた。ガイドさんが「もうすぐ着きます」とアナウンスして、間に合ったとほっとする。しかし、これで終わりではない。

* * *

バスが空港に到着すると、みんなチェックインカウンターまでスーツケースのキャスターをガラガラと響かせながら小走りだ。カウンターの前で、ロンドンで買ったお土産を慌ててスーツケースに入れる。チェックインは無事に終えたが、この空港の厳しい手荷物検査場が待ち受けていた。私の前でも何人も呼び止められている。「引っかけると嫌だな」と思いつつ、私の番がきた。手荷物からパソコンを取り出し、ベルトを外し、携帯電話、鍵などあらゆるものを出し、靴を脱ぎ、ゲートを潜り抜けた。「良かった」警告音は鳴らなかった。

手荷物もOKのようだ。「何とかクリアした。ここまで来ると安心だ」と思って、案内板をふと見ると、搭乗口は『ここから歩いて20分』の文字である。時間を見ると、出発時間まで残り15分を切っている。売店を横目で見ながら再び小走りだ。搭乗口に着いたのは5分前。慌てて飛行機に乗り込んだ。

全員が成田空港に無事に帰国し、慌しいツアーも終わった。初対面の方々とも親密な関係を築けた。ブルーな気持ちはどこへ行ったか。あー楽しかった。セルジオに会って、最高だね！

先刷り版のルールに見入る

(株)日経東京製作センター
東雲工場輸送管理部部長

岡村 洋一

今回のコンプトツアー参加が決まり、パスポートを引っ張り出してみました。当然、有効期限切れ。パスポートを使うのは15年ぶり、海外出張は23年ぶりです。パスポートの申請もですが、スーツケースは鍵を紛失、新調することになりました。ツアー申し込みから出発まで日数があるようで、結局説明会後の数日前に慌てて必要なものを揃えて、いざ出発となりました。

13時間プラス乗り継ぎ90分のエコノミークラス、前の座席との間隔の狭さは覚悟していましたが、前回の記憶よりも狭い、しかも途中でお尻が痛くなり、何度もリクライニングを倒したり戻したり。それもそのはず、15年で体重が? kg増えてメタボ体型に磨きがかかったためと一人納得した次第。ベルリンに直行便が飛んでいないのは残念でなりませんでした。

* * *

ツアー中のバス移動は非常に楽で快適に目的地に連れて行ってくれました。私は一番後方の座席にいつも陣取り、デジカメをずっと構えて車窓からの風景を撮っていました。

ベルリンは道路が広く、本当に緑が多く、空が広い印象。しかし、やはりまだ旧ドイツ地区では建物の色合いというか、建物そのものが古くて暗い感じを多く受けました。

ロンドン市内は公園の緑以外は緑が少なく、狭いくねくねした道路が多く、テムズ川に向かってなだらかに下っていて、空は狭く見える印象でした。ところどころ空が広く見える場所は、かなり大規模な再開発工場の現場で、大型のクレーンが林立していて、数年後にはやはり空が狭く見えるようになるだろうなあと思われました。

メッセ・ベルリンでのIFRAセミナーで印象に残ったのは、広告のアドヴァタイジングと編集のエディトリアルからの造語「アドヴァトリアル」。広告代理店は、広告主の依頼を新聞メディアに持ち込まないかもしれないので、新聞社が広告スペースを売るのではなく、広告主に様々なデジタル技術や最新の印刷技術を駆使した広告のプレゼンを行い、編集と関連のある広告を直接取って行くというもの。これに関しては参加者から質問が出ましたが、ドイツにおいては、地方の新聞社は国際的大手広告代理店との関わりが少なく、総合的な広告事業を行うことでメリットが出る。ドイツ国内は中小広告代理店が多く、大手新聞社が代理店事業を行うことにそれほど支障はないとのことで、日本との考え方の違いを感じる質疑でした。

独アクセル・シュプリンガー・シュパンダウ工場と英ニューズプリンターズ・ブロックスボーン工場の規模は圧巻でした。両工場ともオフセット・デジタル印刷のハイブリッド印刷でしたが、2工場の多セクション印刷への対応の違いも興味深いものでした。シュパンダウ工場で、プリントリールに先刷りセクションを巻き取り、そのプリントリールが自動で切り替わり、ストックヤードに収納されていく様子は思わず見入ってしまいました。



シュパンダウ工場のプリントリール

その後工程の発送場では、翌日朝刊にインサートするプリントリールに巻き取ったマガジンやリーフレットがパレットに積まれて、フィード調整をしていましたが、本番稼働している発送場の見学も個人的にはしてみたかったです。一方、ブロックスボーン工場では、バルーンフォーマーを駆使して先刷り分のブロード紙とタブロイド紙を一連印刷し、これをそのままパレタイジングしてトレーラーで事前に代理店まで運んでしまうということで、欧州型多セクション新聞への対応の最新モデルを見た気がしました。同時に日本との発送・輸送に対する考え方の違いも感じました。

最後に今回のツアーに参加でき、いろいろご尽力いただいた事務局の方へ御礼申し上げますとともに、ヒースロー空港で貴重な経験をしたセルジオ会のみなさんとの再会を楽しみにしています。

「ベルリンの壁」に胸痛く

㈱日経西日本製作センター
西部工場製作部長

山田 周治

初めての海外出張、妻や社内の誰からも羨ましがられたCONPT-TOURだったが、事前準備やハードスケジュール・語学力の問題など期待と不安の日々を送り、いざ欧州へ出発。

飛行機嫌い、閉所の恐怖と戦いながらのロンドンを経由する約13時間のフライトは非常に辛かったが、ベルリン到着後の夕食会ではドイツ料理とビールの旨さは疲れを癒してくれるだけでなく、翌日からのハードな日程に備え英気を養った。

* * *

翌日はWPE2013を視察、出展社は約300社で新商品の展示や紹介を行っていたが、展示機器も少なくモニターでの説明が主流で少し残念だった。IFRA講演では、欧州の新聞業

態と今後の戦略などがテーマで講師の「デジタル印刷はオフセット印刷に代わるものではなく新しいビジネスモデルを開拓するものである」との言葉が印象に残った。

2日目はアクセル・シュプリングァー社のシュパンダウ工場を視察、マンローランドの輪転機に付加されたコダック製インクジェット装置を使用して印刷された「ビルト」紙を実際に手にした時は、欧州紙のデジタルビジネスへの本腰を感じる事ができた。

3日目はベルリンから約2時間のフライトでロンドンへ到着、デジタル印刷に積極的なSTROMA社を視察した。朝日・読売新聞の現地版以外に数多くのデジタル新聞を受託印刷するなど、新しい新聞形態の可能性を感じることができた。

4日目、最終の工場視察はニューズUKのブロックスボーン工場、世界最大規模を誇る工場はマンローランド製輪転機12セットにアクセル・シュプリングァーのシュパンダウ工場同様にコダック製のインクジェット装置が「ザ・サン」を印刷、ここでもウェブ読者の取り込みを実感できた。

* * *

オプションツアーには全て参加した。ベルリンでは「ベルリンの壁」「ポツダム広場」「帝国議会議事堂」ロンドンでは「バッキンガム宮殿」「ウェストミンスター寺院」「大英博物館」などを見学した。ベルリン中心部は、近代的な建物が昔の建物と調和し、都会的な街並みをしていた。ロンドンでは市内の景色もさることながら、歴史を感じさせる建物には目を奪われた。

ポツダム広場付近には壁跡が残っており、実際にここに壁があったのだと思うとなんとなく緊張し、当時の人々の気持ちを思うと胸が痛くなった。欧州滞在の5日間は何れも忘れられない思い出となった。ただ、英語・ドイツ語なんて分かるはずもない。身振りに関西人特有のジェスチャーと笑顔を交えたが、

失敗の連続で滞在中は言葉の「カベ」を感じた視察となった。



「ベルリンの壁」にタッチ

弾丸ツアーの忙しい中、最終日の研修会用のレポート作りをされた(黒澤さん・川内さん・青山さん)ご苦労様でした。頭が下がります。

最後に同じ業界で頑張っている「セルジオ会」の皆様、枠を超えての仲間作りの絶好の機会となりました。いろいろとお世話になり有難うございました。今後ともよろしく願います。

視察のキーワードは「壁」

読売新聞東京本社 制作局技術二部次長

武田 臣司

私にとって初めての海外出張で、初めてのヨーロッパとなった今回のCONPTツアー。参加できるこの機会に感謝しつつ、まだまだ先と日々過ごしていると、あっという間に出発当日。前日までは不安もあったが、成田に着くと期待のみが膨らんだ。

1か国目のドイツ市内視察で訪れたポツダム広場では、ベルリンの壁の跡を見ることができた。私も思わずその跡を跨いで記念写真を撮ってもらったが、中学の教科書が頭に浮かび、深い歴史を感じるとともに、今回の視察キーワードのひとつは「壁」ではないかと思った。

紙とデジタル、記事と広告、新聞社と読者、日本と海外、新聞社とメーカー。それぞれ2つの異なるもの、異なる立場の間にある壁が取り払われ、融合することで新しい何かが創造されると思うが、今、想像できるのは輝くような光ではなく、うっすらとした光。秋の気配をまとったベルリンの街並みと似ていると感じた。

* * *

紙とデジタルの関係で言えば、ハイブリッド印刷の活用による部数を伸ばす取り組みと、デジタルへの誘導である。紙とデジタルのそれぞれの特徴を活かしつつ補完するという事例のひとつ。ドイツのビルト紙、イギリスのザ・サンでは、ナンバリングやワンデーパスワードとして既に運用されている。日本では同じ用途で活用できるか疑問ではあるが、もうひと工夫、もうひと捻りすれば、何か生まれてきそうな気がする。

また大胆な考え方の提案も視察初日のセミナーで紹介された。ビルト紙の事例として「紙以外のチャンネルは、新聞社でなくてもできるが、紙を含めたサービスを主体的に提供できるのは新聞社だけである」というコンセプトのもと、新聞社がワンストップのサービス提供者となること目指している。という挑戦的な取り組みで、新聞社と広告会社の壁を壊しているようだ。

* * *

ところで、今回の参加者における新聞社とメーカーの壁は、すぐに取り払われていた。さらに業界、会社、役職、世代を超えた人と人とのつながりが期間中、美味しいドイツビ

ールのように日を追うごとに熟成されていった。それは11月1日の報告会后に集まったセルジオ会(同窓会)を見れば一目瞭然だった。他愛のない会話も沢山あったが、新聞の未来を語り合う雰囲気には熱いものがあり、とても嬉しくなった。

視察を通して感じたことは、欧州では既に新たな取り組みにチャレンジしている、ということ。新聞社、ジャーナリズムの使命を柱にし、読者、広告主、コンテンツ提供先という異なる顧客に対し、顧客視点を取り入れ、顧客に価値を提供しようとしている。ビジネススクールの教科書的表現になってしまったが、素直にそう感じた。

私にとって一番の収穫は、参加者の方々とのお会いであったと思う。新聞制作技術という共通項で集まった異業種の方々と飾らない率直な交流ができたこの1週間は、貴重な経験と人脈を得られた最高の機会となった。

寒い国で出会った人々

日本新聞協会
編集制作部技術・通信担当主管

藤高 伊都

新聞協会の技術・通信担当に異動して3か月半。日本の新聞に関わる技術について何も知らない私が、欧州の新聞技術視察で果たして何を学ぶことができるのか、出発前は不安でいっぱいだった。

欧州では、新聞の発行部数と広告収入下落が日本の比ではない。今回訪問した大衆紙ビルトを発行するドイツのアクセル・シュプリンガー社は、渡航少し前に傘下の新聞・雑誌の一部を売却…と欧州では暗いニュースばかり。何をもちて起死回生を狙っているのか。厳しい状況が日本より先をいく欧州の一部を、自分の眼で見る機会になった。

* * *

新聞をめぐる状況は、厳しいかもしれない。

しかしお会いした人々は、なぜか希望に溢れていた。私の理解では、危機が迫っていると失敗を恐れず様々なことに挑戦せざるを得ない。そして、新しいことに挑戦し切り拓いていく仕事は、わくわくするほど面白いのだ。

この「新しいこと」が、技術と結びついていた。究極的には個人別の新聞発行すら可能にするデジタル印刷。ビルトと英紙サンは、1部ずつ異なる有料サイトへのアクセスコードを新聞に印刷し、課金サイトへの誘導と紙の購読を促すサービスを始めたばかりだった。ビルトの20代後半の編集者は、既に紙の新聞とデジタルの垣根を完全に取り払っており、紙を含む多様なチャンネルへの情報提供が目標だと言う。そして眼をキラキラさせながら「新聞記者にとって今は面白い時代。ツイッターなどで読者と繋がりながら、写真を撮り動画を撮り、時に動画出演もする」と言っていた。ウェブのツールは、彼にとっては記者としての仕事を幅広いものにする手段であり、頭の中には「あれもやりたい、これもやりたい」と、アイデアが浮かんでいるようだった。「3年後のビルトに重要なのは何？」との質問に、課金コンテンツ、ローカル情報、SNSなどを挙げた。これ自体は決して新しいことではないけれど、若い世代が新しい新聞の形に挑むことを任されて、やりがいを感じていることが伝わった。

* * *

英国では、マードック傘下のニューズUKとその印刷会社のブロックスボーン工場を訪問した。工場では、「新聞社の一部にとどまらず、世界一の印刷拠点になるのが目標」との野心的な言葉を聞いた。ここでは、ハイブリッド印刷を可能とする設備を導入したばかり。このような設備投資も、世界一になる一歩なのかなと、ほんやり思った。工場の壁の所々に、ちょっとヒネリの効いた言葉とともに、絵が描かれていたのが印象的だった(写真)。世界一を目指す印刷工場は、働く人々

の気持ちを大切にしていた。



視察の間、たくさんの技術・印刷設備の分からないことを団員の方々に教えてもらいながら回った。当初抱いていた不安は、皆様のおかげで消えていった。感謝するとともに、今後ともよろしくお願ひします。

日本語のありがたさ

西研グラフィックス(株)
東京支社課長

小池 享

まず始めに御礼から。飲み会幹事を拝命しましたが、結局自室は解放せず、勝手に命名しますが、スナック宇宙、バーアンベ、クラブ岩野での開催、誠にありがとうございます。またお酒やおつまみをご提供くださっ方々にも感謝申し上げます。

* * *

今回私は初めての海外出張で海外での生活というものが感覚的にわからない状態でした。約1週間という短い期間ですが、実際に海外生活を経験してみて気が付いたことがあります。それは日本語がないということです。

私は新聞業界に携わる一人として、また通勤時間が長いこともあり、毎日紙の新聞を読んでいます。元々日本語力が弱いので、新聞からボキャブラリーや一般常識を学ぶことによって何とか社会人としてやっていってるつもりです。

ベルリンのホテルではNHKワールドというTV放送を見ることができましたが、デブスペクターが司会で出ているものの、全て英語での放送でした。ロンドンでは日本向けの番組がありませんでした。

そんな日本語への渴望を抱えている中、Stroma社を見学しました。今回のCONPT-TOURのメインテーマの一つであるデジタル印刷の工場です。日本の大手新聞社の新聞を受託しており、フルデジタルの実印刷も見学できるとの事で、皆様の期待も高かったように思います。私もデジタル印刷機に興味がありましたので、非常に楽しみにしておりました。設備の説明の後、実印刷がスタートしてサンプルとして1部新聞をいただけることになりました。本来なら印刷品質や体裁についてよく観察をし、評価しなければならぬでしょう。

ところが日本語の情報に飢えていた私は新聞を手にした瞬間、メーカーとしての仕事は忘れ記事を読むことを優先しました。1面には新潟で35度を超える猛暑日になったと書いてあり、「マジか～！、異常気象だな。」とかただの一読者に変貌しました。

海外で日本語の活字に出会えたことの喜びは何物にも代えがたいものがありました。バスに戻ってから新聞を読み続けました。

* * *

初めての海外出張で日本の良さに改めて気づきました。普段実務に追われ心に余裕のない私にとっては、非常に貴重な経験となりました。ツアーで一緒させていただいた「セルジオ会」の皆様には非常にあたたかく接していただき、楽しい1週間を過ごすことができました。心より感謝申し上げます。

またパワーあるれる皆様には、今後も末永くお付き合いいただけますようよろしくお願ひ申し上げます。

機中 12 時間半

第一工業(株) 大阪支店搬送システム部部长
伊達 泰敬

「機中12時間半」成田空港からロンドン空港までの飛行時間です。欧州での滞在時の心配より機中での時間潰しが出発するまでの課題でした。まさか、座席毎にタッチパネル液晶ディスプレイが付いているとは思いませんでした。視野が狭く隣の席にも迷惑をかけず映画を4本見ることが出来ました。また、ゲームや地図アプリ等も多数用意されている優れたものでした。

ロンドン空港(ヒースロー)に到着し、ベルリン空港行きに乗換える時に世界的に取締りが厳しいヒースローのセキュリティチェックがありました。着飾った女性(男性も)は靴・ベルト・装飾品を取らされゲートを通行していました。厳しい検査の様子を写真に撮りました。フラッシュが点灯した瞬間、黒人の検査員が私のところへ駆け寄って来てカメラを指差し何か騒ぎ出しました。「今、撮影したカメラのデータを一掃しろ」と言っているのかなと思いついたところ、検査員の方は満足したのか笑いを浮かべ立ち去りました。

* * *

ベルリン空港に成田空港を出発して約16時間の長旅が終了しました。ベルリン空港で驚いたことは、喫煙場所が厳しいと思っていたのが道路のいたるところに吸殻が捨ててあったことです。よく見るとくわえタバコで歩いている人たちが非常に多かった。

ベルリンではIFRA展、アクセル・シュプリンガー本社とシュパンダウ工場を視察しました。

シュパンダウ工場の輪転機直列8セットとインサーター設備を含む世界最大の発送場とトラックゲート38ゲートは圧巻でした。

* * *

ドイツで印象深かったのはベルリンの壁で

す。市内の地面に残った壁の跡と文化財として残された長さ1.3km高さ4m足らずの薄い壁。東ベルリン側に書かれた著名画家による見事な作品の数々とその壁に落書きをする元気な中国人家族が思い出に残りました。

ロンドンに移動し、キヤノン社を皮切りに朝日新聞・読売新聞の海外版をデジタル印刷しているストローマ社を視察しました。また、ニューズUK社本社とブロックスボーン印刷工場を視察しました。

ブロックスボーン工場はトリプルワイド(6×2)輪転機を6セット2列の構成で12セット設置している。その横に輪転機の1列分の長さ230mの立体紙庫(写真)が並んでいる。



欧州では珍しいインサート処理無しの1工程で処理する日本の一般的な形態に近いそうです。しかしながら、結束した梱包物をパレットに集積し、パレット毎トラックに積み込むスタイルです。何もかもが日本とは規格外であり比較できないがスペースの広さには驚かされました。

* * *

ロンドンの街並みはレンガ造りが多い、5階建て以上の建物もすべてレンガ造りなのが驚かされました。ビッグベン、ウエストミンスター寺院、バッキンガム宮殿等々ニュース

で映る有名な建物ばかりでした。また、大英博物館では無料で閲覧でき、無造作に世界の文化財を展示していました。どれも教科書で見たことのある物ばかりでした。

最後にご同行させていただいた皆様と貴重な経験と素晴らしい思い出を共有できたことを感謝いたします。

駆け足で過ぎた欧州5日間

DIC グラフィックス(株)
新聞インキ事業部関西新聞第一営業部
関西第一担当課長

宮口 定伸

海外訪問は新婚旅行で経験したアメリカ旅行9日間、家族から羨望の眼差しを受け、本人は限られた時間で期限切れのパスポート申請等、一から準備に取り掛かりながら不安の当日を迎え自分に言い聞かせる『いざ出陣～』

飛行機に揺られヒースロー空港経由で約20時間後に初めて欧州の地ベルリンに降り立った。空港に出迎えてくれたガイドの今田さんに対面(何処かで見た様な…)を感じつつベルリン滞在3日間流暢なドイツ語を駆使しながら当団員にドイツ在住35年で蓄積した独国の歴史、お気に入りのカレーソーセージの話題まで、事細かくガイドして頂きました。一方、WPE展ではセミナー及び展示視察を行なったが注目されたIJ関連印刷デモ機の展示は無くパネル・スクリーン掲示がメインで非常に残念な思いでした。その中ベルリン：アクセルシュプリンガー社ではコダック：プロスパー使用によるバリアブルテスト印刷、ロンドン：ストローマ社でもデジタル印刷を間近に視察出来た事は大きな収穫であり実務データ・コスト面など貴重な視察取材が出来ました。

又、視察先で聞いたデジタル課金システムは宅配の違いが大きいのか？デジタル有りきで日本と違い新聞購読をメインとしない節が寂しく感じられると共に未だ『ガラケー』所持の

自分が…感慨深かった！

* * *

此処までの話とは別に日々過密スケジュールの中で毎晩反省会？は『〇〇〇号室です！』と告げられ当日視察の反省・翌日視察の予習と続き、回を追う毎に各人が持寄ったスタミナドリンクと参加人数は増加の一途『旅行前の不安は何処に？』楽しみの化学反応は止まる事知らずに反応は翌朝治まりを見せる。

僅かな視察合間で見たドイツ東西冷戦時代の名残『ベルリンの壁』沿いに歩を進めていると地元高校生が気さくに声を掛けてくれた言葉『ニーハオ!!』には一同驚きと共に即座に言い返せないもどかしさを感じました。

ガイドの今田さん曰く『4年前まで観光国1位は日本でした』残念ながら現在は中国です。

経済発展の妻さは現地の挨拶まで変えるの？ 小さなエピソードの一例です。



全長1.2kmの壁にはアートが施されている

又、ロンドンでも人気日本食店『わさび』の経営者は韓国の方が経営していると日本人の活躍が乏しい事を寂しくも感じました。

* * *

ロンドンでのさよならパーティーで当視察団名を『セルジオ会』と命名しました。ベルリンの熱弁ガイド今田さんを回想し一同異議無く即決？した次第です。駆け足で過ぎた欧州視察5日間、写真と思い出に回想しつつ皆様との再会を楽しみにして居ります。最後に本

ツアーで入念な準備を頂いたCONPT事務局様はじめ、ご一緒させて頂いたセルジオ会の皆様には貴重な経験と素晴らしい思い出が出来た事に感謝すると共にこれからも末永くご指導賜りたく宜しくお願い致します。

皆さんのお陰で、なんとかになりました…。

(株)東京機械製作所

第二事業部 デジタル事業グループ課長

青山 浩士

夏休み前のとある午後「CONPT-TOURへ参加しなさい」との業務命令がありました。今まで海外は現場出張ばかりで、欧州新聞製作事情視察団(CONPT-TOUR)など、自分には無縁のものと思っていましたので「自分には務まりますか?」と上司に問いかけてしまった次第です。その時、上司曰く「大丈夫、レポートを書くだろうけど、出発までに私がちゃんとヒントを書いてあげるから…」と言われ、それならばと申し込みを済ませ、めでたく参加の運びとなりました。

しかしながら、申し込み後COPT事務局より「副団長と最終日の研修会講師と帰国報告会での発表、会報CONPTへの寄稿をお願いします。」と怒涛の注文がありました。

ここでも前での上司曰く「断る理由がないですね!」その一言でお受けしました。

まあ、根っからの楽観主義ですので「なんとかかなさ!」とTOURに出発した次第です。

実は昨年、drupaで出展社側として参加していましたので欧州のデジタル印刷の動向は見ていましたが、はたして1年経った現在はどのようにデジタル印刷を活用されているかベンダーとしては、とても興味を持っておりました。

* * *

そんな中、視察をしますと今年も欧州の新聞購読者の落込みの激しさは変わらず、新聞社も他の事業(Webなど)を活用し、収益を

補わなければと模索していました。

その収益を上げるToolの一つが「デジタル印刷」でありました。

事例としては、オフセット印刷とデジタル印刷を組合わせた「ハイブリッド印刷」や、デジタル印刷が得意とする「小ロット多媒体印刷」など、成熟された新聞市場ではありますが、新たな可能性を間近に感じられたことは私の刺激になりました。また視察した際に、参加された方々の色々な目で見られた率直な言葉が私のメモに残っておりますので、今後の仕事に役立たせて頂きます。

* * *

さて今回のTOUR全体の感想ですが、他の参加者の皆さんと同じく日程的には、なかなかの強行軍でした。

昼間は「バス移動」「視察」と動き回り、夜は美味しいビールと食事に舌鼓を打ちつつ、有意義な意見交換をし、それでも意見交換が足りず、ホテルでは毎晩どこかの部屋で居酒屋が開催されておりました。

さて私はと言いますと、冒頭お書きしましたように「なんとかかなさ!」と始まったTOURでしたが「現地視察」「有意義な意見交換会」は皆さんと御一緒なので問題はないのですが「研修会資料」「帰国後の報告会資料」などは、上司のアドバイスをもらっておきながら、お尻に火がつかなければ事を始めないたちなので、毎回発表ギリギリで原稿を提出。

同じ発表者の黒澤様、川内様、またCOPT事務局の皆さまには大変ご心配とご迷惑をお掛け致しました。

と、お詫び申し上げている、この原稿も実は提出期日前夜に書き記しております。

* * *

しかしながら、今回参加された皆さまの顔やエピソード(ヒースロー空港でのダッシュなど)を思い浮かべながら書いているこの時間はとても楽しいもので、ご一緒させて頂いた方々には、改めて深く感謝申し上げつつ、

今後は「セルジオ会」という名のもとに、末永いお付き合いをさせて頂きたく、宜しくお願い申し上げます。ありがとうございました。

滑り込み、セーフ

(株)東京機械製作所 第一事業部
オフ輪事業グループ営業係長

安部 史郎

久しぶりの海外出張となりました今回のツアーですが、実は、期待感半分の方、不安も半分(生来の心配性)でした。先ず、行き乗り換え空港が、あの悪名高きロンドン・ヒースロー空港。当社社員でもロストバゲージした光景を何度となく見聞きしているのに、30名分のトランクが到着地であるベルリンで無事受け取れるのか?でしたが、それも杞憂に終わり、30個のトランクは無事皆様の手元に戻り、幸先の良いツアースタートとなったのです。前半の滞在先ベルリンで、度々遭遇したことですが、すれ違うベルリン市民(恐らく)が、「ニーハオ、ニーハオ」と。いまだに東洋人=中国人という理解なのか、それとも、かつては日本人がそうであったように、昨今の経済力(最近はそうでもない様ですが)が物語る中国人観光客の増加の影響なのかと、自分なりの結論は、後者かと。

* * *

今回のメインテーマのひとつである新聞界のデジタル化の動向に関しては、オフセットの代わりにデジタルではないという結論でした。各新聞社共に、オフセットの新聞、デジタルでのスポット印刷、ウェブ(電子版)をリンクさせて、如何に読者を囲い込むかのビジネスモデルを試行錯誤している様でした。今回は、“点”で物事を見聞きしているのに、今後、今回見学した新聞社のビジネスモデルの変化やその効果等を、“線”で観察する事が非常に大切だと感じた次第です。

話は逸れて、ベルリンのレストランの話。

ベルリン最後の夕食は、PARIS-MOSKAUという、一見フレンチとロシア料理の融合の様な不思議な名前のレストラン。ベルリンでは有名なレストランの様で、あのメルケル首相も2週間程前に来られたとか。全員が着席した後に、どの席にメルケル首相が座ったのかを、店の方に聞くシーンがあり、なんとく一瞬ザワザワ・ドキドキしたのですが(私だけでしょうか)、店の方から発せられた言葉は「別のフロアでした」と。因みに、白ワインは流石にドイツワイン!と思わせるものでしたが、赤ワインを注文したところ、自信をもって出せるものがないのか、あっさりとMade in Italy が供された時には、少し肩すかしを食わされました。

* * *

後半のロンドン滞在内容は、割愛致しますが、帰りのヒースローまでは、ハラハラでした。15:45ホテルをバスで出発し、予定では16:30に空港に到着し、ゆっくりお土産でも買って、人によっては税金還付手続きを、との目論見でしたが、現地ガイドさんも予想できなかったまさかの渋滞。ドライバーは当初は余裕を見せていたのですが、いつまでも解消されない事態に段々イライラと、抜け道か裏道かを行くのですが、さらに渋滞で事態は悪化。我々も段々と焦りを感じ、もしかして乗れないのでは、そうなれば今日は何処に泊まるのだろうか、明日の便で予約が取れるのだろうか等々、最悪の事態も視野に入ってきました。しかし、結果は出発のほぼ1時間前に到着し、チェックインカウンターで何とかギリギリ搭乗手続き完了と安心するのもつかの間、最後の試練か、搭乗ゲートまで歩いて20分との表示が目に入り、当然歩いたら間に合わない訳で、搭乗ゲートまでダッシュ、「滑り込み、セーフ」でツアーを締めくくりました。

最後に、今回のツアーに参加でき皆様と一緒に過ごせたことに深く感謝を申し上げます

す。今後も「セルジオ会」の皆様とは長く深いお付き合いになると思いますが、何卒宜しくお願い致します。

Ampelmann (アンペルマン)

東洋インキ(株) 新聞販売統括部販売部
第一課課長補佐

梅田 賢二

ドイツ・ベルリンで有名な男を紹介させて頂きます。その名も「Ampelmann (アンペルマン)」。ドイツで現在、交通安全、ドイツ統一・復活など、様々なシンボルとして活躍しております。プロフィールは以下の通り(アンペルマン日本公式サイトより)。

出生日 : 1961年10月13日
出生場所 : ドイツ・ベルリン
体重 : ちょっと太め
職業 : 交通整理
性格 : チャーミング
好きな食べ物 : 電気
ペット : 白クマ

今回「World Publishing Expo 2013」がドイツ・ベルリンで行われましたが、この街で目に付くのが、この「信号男」アンペルマンです(私達が宿泊したホテル内や新聞など、至る所で見かけました。皆様ご記憶ございますよね)。横断歩道を渡る際、私たちに「渡って良い」「渡っちゃダメ」と教えてくれる、青や赤でひときわ輝く歩行者用交通信号機です。通常、丸い青や赤だけのデザインですが、その「信号男」はアタマでっかちの三頭身。1960年代のモータリゼーションによる交通量の増加にともない、増える交通事故から歩行者を守るために、視認性に優れたデザインが誕生しました。

このアンペルマンの優れた点は、進行と停止を指示する意味を、青と赤の色彩による単

純な記号要素に置き換えただけでなく、表情や身振りによる非言語的要素を加えたことにあります。絵文字による誰にでも理解しやすい信号は、子供や視覚障害の方、海外旅行者を含む歩行者の安全を守るふさわしい形と言えます。今で言うUD (ユニバーサルデザイン)の走りでしょうか。



1960年代、アンペルマンに代表される新しい標準言語としての「絵文字」は、1964年の東京オリンピックの案内シンボルや、その後の各地で開催される万国博など近代にまで受け継がれています。

旧東ドイツ時代の交通心理学者によって生み出されたアンペルマン信号機は、1990年のドイツ統一後、旧西ドイツの信号機にどんどん置き換えられていきました。しかしデザインの良さに惹かれた旧西ドイツ出身の産業デザイナーとベルリン市民らによって、1997年ベルリンの交差点に復活しました。1999年にはアンペルマンコレクションを立ち上げ、キーホルダーやTシャツ、カバンなどアンペルマングッズが次々と発表されました。今では、ドイツは勿論、東京の白金高輪や渋谷にもショップ(店)ができました。皆様も一度足を運ばれてはいかがでしょうか。

* * *

最後になりましたが、今回のCONPTツアーに参加できましたこと、また7日間一緒に欧州で時間を共有出来ましたこと深く感謝申し上げます。今後とも末永くお付き合いさせて頂きたくお願い申し上げます。

紙のビジネス発展の余地

富士通株 社会基盤システム事業本部
メディアシステム事業部

田淵 晃一

入社して12年になり、ずっと上流工程(CTS)のシステム開発に携わってきた。今では、デジタルメディア向けコンテンツを新聞製作システムから配信する開発をしている。こんな私はもちろん印刷業界の知識はなく、当たり前のように日本の新聞社の印刷工場にも行ったことがない。

今回の欧州デジタル印刷事業の視察メンバーに参加するには少し荷が重いと思ったが、何事もやってみようのチャレンジ精神で上司に参加の意思を伝えた。

説明会では、どのような方達が参加されるのか不安だったが、その日の懇親会、2次会、3次会…までご一緒させてもらい、帰る頃には深夜1時を過ぎていた。この時点で、メンバーに恵まれた。楽しいTOURになること間違いなしと感じた。

* * *

TOURでは、World Publishing Expo 2013でデジタル印刷機メーカーの見学、Axel Springer(ドイツ)、News UK(イギリス)のデジタル印刷を用いた新しいビジネスへの取り組みとそれぞれの印刷工場でのデジタル印刷機を実際どのように展開しているかを視察した。

金ピカの高層ビルのAxel Springerを訪問した際には、外観もさることながら、フロアを案内して頂いた編集者が、まるで俳優のようなカッコ良さが印象に残った。Axel SpringerではTwitterやビデオを活用したりポートをしているとのこと。我々もこれらのツールの有効性を議論し、システム化の検討をしている。しかし、既にワークフローが確立していることに驚いた。

News UKでは、ハイブリッド印刷を用い

て1部毎異なるコードを印字し、このコードをLOTTOのチケットに入力することで、セカンド・チャンスを与えるLOTTOビジネスに取り組んでいた。今は黒の英数字(コード)しかデジタル印刷できないようだが、1部毎異なる印刷が自由にできるようになれば紙のビジネスはまだ発展の可能性があるのではないかと感じた。また、デジタル印刷の普及により上流システムも何らかの変化が必要かもしれないと感じた。

最終日は雨のロンドンを観光後、空港へ向かった。



道路が非常に混雑し、16:30到着予定が18:00過ぎに到着、チェックインの手続きを行い小走りで搭乗口に着いたのは19:10、そして19:15出発。お土産を買う暇もなく帰路に就いた。

* * *

慌ただしくも楽しいTOURだった。しかし一つだけ残念のことがあった。TOURの帰国日が今年4歳になる娘の初の運動会だったのである。15:00成田着だったため参加することは物理的に考えて無理だった。参観者が母親一人では寂しいので田舎である高知のじいじばいばに急遽来てもらった。帰国後ビデオでじいじと楽しそうに親子競技に参加している映像を見ると少し悲しい気持ちになった。しかし、11月1日の報告会でセルジオ会のメンバーと再会し、飲んで語って楽しい時間を過ごせば、やっぱりTOURに参加して良かったと思う。

最後に、セルジオ会の皆様には大変お世話

になりました。今後共、よろしく願いいたします。

充実した一週間と皆様に感謝の一週間

富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ(株)
新聞営業部販売一課

山本 大一郎

初めてのCONPTツアー、初めての海外出張、そして初めてのヨーロッパと初めてづくしのツアーでした。また、日程がJGAS終了後、6日から12日まで弾丸CONPTツアー。そして12日、成田空港到着後、伊丹空港へ直行し、13日、大阪で友人の結婚式に出席(歌手のSuperflyが新婦の友人で来ていて、生歌が聴けました!)、そのまま朝まで懇親会。と、休みがなくなかなりタイトな日程でしたが、体に異変もなく無事になんとか乗り切れました。

* * *

さて、CONPTツアーの昼の部はヨーロッパ市場の見学です。今回のCONPTツアーを一言で表すと「デジタル」でした。インクジェットなどのデジタル分野の出展が多かったIFRA展から始まり、インクジェットシステムを導入したヨーロッパで発行部数1位、2位を競いあう、ドイツで「BILD」を発行しているアクセル・シュプリンガー社、ロンドンで「The SUN」を発行しているニューズUKの両本社と工場を見学。インクジェットで新聞印刷をおこなっているストローマ社の見学。ヨーロッパの新聞社は部数が近年落ち込んできている中、なんとか部数減を抑える為に、インクジェットシステムが、付加価値をつけ、部数減とデジタルビジネスへの架け橋となっていると感じられました。

* * *

CONPTツアー夜の部は、今回、幹事に任命され、バック一杯につまみとお酒を持参した所、皆様も持参しており、集めれば大量のお酒とつまみ…。いつの間にか持参した物の

消化がノルマとなり、ホテルに帰れば、毎晩懇親会を行い、お酒・つまみを減らしていく…。なんとか最終日までに消化は完了し、バック一杯に入っていたつまみも空になりました。皆様のご協力に感謝です。

総論としては、昼間は休憩が取れないくらい過酷なスケジュール(タバコを吸う数分の時間がないくらい)。夜は日本から持ち寄ったお酒の消化で深夜まで飲み続ける懇親会。朝起きて、いつのまにか時計を見たら深夜12時を過ぎている毎日でした。その分、中身があり、濃いツアーであったと思います。

最後に、今回はメンバーに恵まれ、天候にも恵まれ、そして参加したメンバーが無事(旅行中は色々ありましたが…)帰還できた事は何よりも良いことでした。今回のツアー同窓会名を「セルジオ会」(今回のツアーで強烈に印象に残った人物由来)と名づけ、先日、第一回セルジオ会を開催したところ、多くの人に参加して頂き、また、かわいがって頂き、メンバーに恵まれたと感激しました。今後も継続してセルジオ会を持続して行きたいと思いますので、ご同行の皆様、今後もよろしくお願い致します。

五感に訴える印刷物の可能性

富士薬品工業(株) 大阪営業所営業部長
森島 徹

ツアーの説明会から出発当日までの18日間は慌ただしさの大半が海外ツアーへの不安と気ぜわしさに占められており、国内旅行とは違った異質な感覚がいつもと変わらぬ日々の中にどことなく漂っていた。今回の参加者は添乗員含め31名。知り合いは1人しかいない心細いツアーだと思っていたが、事前説明会後の新橋の宴席でその不安が払拭された事で私の中でも何かが吹切れた。

今回の視察は新聞デジタル印刷が主題であると同時に日本の新聞印刷の方向性を探るツ

アであり、材料メーカーとしても新たな糸口のヒントがつかめるツアーになる事を望みたい。さてIFRA展は文字通りインクジェット展であるが、セミナーの中で「インクジェットがオフセットの代わりになる事を考えているならば止めた方が良い。インクジェットは従来の新聞に付加価値を付ける手段である」オフセット印刷全てがインクジェットに置き換わると思いがちだがハイブリッド印刷による差別化と言う意味では今後少なからず影響を及ぼしてくるようになる。ここで比較して見たい感情にかられ、果たして12年前の「CONPT」では何が話題になっていたのかを知りたくなった。「第27CONPT-TOUR2002」の時代背景を回顧してみたいと思う。

(北米)：(ポストスタンダード社)

- KPGのサーマルCTPを導入移行中(最近までNAPPの樹脂板を使用)
- 2002年度中にはCTPへの全面移行の方針
(北米)：(グローブアンドメール社)
- CTPは未導入
- PS版=アナコイル社
- 昨年より電子新聞事業を開始(北米)：(トロントスター社)
- 北米のCTP化は未だ先との考えから現在導入の予定なし。
- しかし上流ワークフロー整備のタイミング如何ではCTP化への移行も有り得る。

2002年「展示会」の概要

- 市場へのCTP紹介は済んだ状態
- クレオ社：「Trend Setter」の展示
- アナコイル社：サーマルポジ版(合紙なし、プレヒートなし)をアピール
- BASYS社：UVセッターを展示
- AGFA社：CTPフォトポリマーとサーマルプレートを展示
- KPG社：CTPサーマルプレートを展示。

* * *

あれから僅か12年後の2013年、現在の印刷業界を取り巻く状況をだれが想像できただろう

う。インクジェットで新聞印刷。現在の技術を携えながら12年前の時代に戻ったなら果たして意見は理解されただろうか。それとももう既に12年後の構想は見えていたのだろうか。銀塩、フォトポリマー、サーマル、現像レス時代が目前に迫る。プレートは小さくなり、極論はプレートを使用しなくても印刷できる「インクジェット時代」。印刷手段は変わっても印刷物は人間の五感に影響を与える事ができる。匂い、味、感触、などWebには出来ない事が印刷では可能であり、体に障害を持つ人に対しても様々な手段で情報を提供できるのが印刷物としての最大の特徴でもある。印刷は未知の可能性を秘めている。技術革新が速い中、私としては少々愚老だが昭和が懐かしい。現在のように物が溢れた時代ではなかったが、不思議に不便さは無かった。ラジオで子供がおかあさんに「おかあさんはいつ生まれたの」昭和と答えると「ああ昭和時代だね」との返答。すこし笑える。

今回の「CONPT-TOUR2013」では皆様にお世話になり、この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

電子新聞のジレンマを見る

三菱重工印刷紙工機械(株)
営業統括部長

内生 孝史

過去2回エントリーしながら果たせず、ようやく3度目の正直でコンプトツアーに参加する事ができました。しかも、恐れ多くも団長として。自身に課した事は毎日深夜までしっかり懇親会する事とジョギングで新しい発見をする事。不取敢、目標達成できました。

ベルリンでは、夜明け前のライトアップされたブランデンブルグ凱旋門を前に強国プロシャのビスマルクに想いを馳せ、帰路、偶然にも「ヒロシマ通り」に巡り合い、嬉しく思いつつも、その命名の由来を想像してみました。



それにしても今回のツアーは超弾丸ツアー。実質4日間は過密スケジュールの消化に追われ、時差ぼけを感じる余裕すらなく、只管駆け抜けた感がしました。その分、内容も凝縮されメンバーのチームワークも良く、楽しいツアーでした。

* * *

電子新聞へ傾注せざるを得ない欧州の新聞社。而して、その電子新聞の赤字に苦しみ脱却できないジレンマ。紙の新聞の部数減への打ち手としてのデジタル印刷機を搭載した輪転機。その結果が出るのはもう少し先。欧州の状況は必ずしも日本には当て嵌まらないでしょうが、さて日本はどの方向へ。今回各社より選ばれし若いメンバーの方々こそが日本の新聞業界の近未来を率先して切り開いていくものと確信しています。

* * *

さて、ドイツ最大の新聞メディア、アクセル・シュプリングァー本社にて、新聞を読む猿の彫像(写真左)に出会いました。そこにはドイツ語で、「Den New Yorkern in alle Welt strecken wir uns dem Seelenvogel entgegen.」直訳すると意味不明ですが、超意識すると、「世界中の仲間に故郷を忘れないように新聞を届ける」という事でしょうか？ここに新聞の使命と新聞社の精神を垣間見る事ができるかと思えます。

又、マードック氏が率いるニュース・インターナショナルでは、編集局に「牛」の彫像(写



真右)が待っていました。ドイツの猿、イギリスの牛と、動物を職場に並べる欧米人のユーモアと寛容さは日本人にはなかなかないもの。我々もこんな心の余裕を持ちたいですね。最後にどうしても行きたかった処は、ロンドンのキングスクロス駅にある、ハリーポッターに出てくる架空の9-3/4プラットフォーム(写真下)。壁をすり抜けるとHOGWARTSの学校に向う列車に乗る事ができる。最終日が残された唯一のチャンスで朝駆け。ロンドンオリピックの改修で場所が移動したらしいが案外簡単に発見する事ができた。ひょっとしたら壁をすり抜けることができるかも、、、と、かすかな期待をもってカートに向かいましたが、やはり残念な結果に終わりました。でも、娘が羨ましがる土産話を持って帰国する事ができました。





ポツダム広場の放置自転車
(第一工業・伊達泰敬氏)



メッセベルリン
(三菱重工印刷紙工機械・内生孝史氏)

TOUR



思い出の1コマ



全員集合=WPE展会場にて



10時ちょうどのビッグベン
(西研グラフィックス・小池享氏)



ベルリンの壁の壁画
(東京機械製作所・安部史郎氏)

樂事万歳

輪転機の3度目の立ち上げに挑戦

山梨日日新聞社
新聞印刷センター次長

中村 正

休日の樂事は、気の合った仲間と楽しむゴルフだ。自慢できるような腕前ではないが緑一色に染まった芝生の上を会話しながらラウンドする。最高に贅沢な過ごし方だと思う。昼食で軽く一杯やる食前酒もまた格別な味がある。ナイスショットとミスショットを繰り返しながらラウンドが終わると近所の居酒屋で反省会だ。その日のゴルフを振り返りながらそれぞれの「たれば」話が始まる。最終的にはスコアカードを見てため息をつくパターンが圧倒的に多い。「次は頑張ろう」とお互いに慰め励まし合い長い一日が終わる。

* * *

さて仕事の樂事といえば、新輪転機立ち上げに全力投球していることだ。34年前の入社当時、甲府駅近くにある本社では三菱重工製の4号機と13号機が稼働していた。4号機は商業印刷機、13号機は新聞印刷機として使用されていた。13号機の印刷速度は時速7万部で「最大24ページ4ヶ面カラー」の輪転機だった。昭和43年に導入されたこの輪転機は老朽化が進み故障も多くなってきたことと、新聞発行部数が著しく増加し始めたことから昭和59年7月に三菱重工製187号機1セット「最大32ページ4ヶ面カラー」を稼働させることとなった。当時、24歳の若僧だったが、新輪転機プロジェクトチームの一員として三菱重工糸崎工場での3週間の研修に参加した。この輪転機の印刷速度は時速12万部で旧輪転機の1.5倍の印刷能力があり日本で初となる2セクション印刷を成功させたもの。セクション印刷には相当苦勞させられたが思い出深い輪転機だ。

月日は流れ新聞発行部数は更に増加し、モ

アカラー化が進み新聞を取り巻く環境が大きく変化した。このため平成6年12月に甲府市南部に位置する小瀬に新工場を稼働させる運びとなった。この工場では三菱重工製の同床式輪転機3段バルンフォーマー2セット「最大40ページ16ヶ面カラー」を導入、3セクション印刷に挑戦した。本紙24P+4P+タブ24Pという紙面構成で毎週木曜日発行だが、タブロイドの紙流れが発生し損紙の山、山、山。三菱重工の設計とお互いに知恵を絞り何とか落ち着いた。3セクションでの多ページタブロイド印刷は私にとって輪転機2回目立ち上げの苦い経験となった。

* * *

まさか3回目の立ち上げを経験するとは夢にも思わなかった。来年2月、甲府から約20Km西にある韮崎市に新工場が稼働する。輪転機は三菱重工印刷紙工機械製の非常にコンパクトな最新型の4×1機2セットで「最大40ページ24ヶ面カラー」だ。建屋は免震構造で自家発電は2000KVA、周辺機器も最新型で設備面は最高に整っている。11月から印刷テストが始まった。新工場の稼働に向けての作業では、これまでの経験で得た技術や知識をすべて注ぎ込んできた。このプロジェクトはまさに印刷技術者人生の集大成である。どんな素晴らしい刷物が印刷されどんな波及効果をもたらすのか楽しみだ。技術者冥利に尽きる貴重な経験をさせてくれた会社に感謝！感謝！の気持ちでいっぱいだ。



そらまめがやってきた

クォード・テック・インク日本支店
営業課長

三木 幸一

東日本大震災後直後、飼い主と離れ離れになった犬猫たちが津波や原発の被災地を彷徨いボランティア団体が保護活動を行っているとの報道に接した。妻と私は犬を引き取ることにした。

里親希望の登録を済ませ、連絡を待った。2頭のアラスカ犬を一緒に引き受けてもらえないか、との打診が入った。聞けば母親と息子であると推測され、息子は母親と離れると半狂乱になるため同時に引き取ることが条件だった。息子は後ろ足が不自由、加えて癲癇があると言う。年齢も素性もわからない。他に引き取る人を探すのは難しいと想像した。

ボランティアの方に連れられてやってきた2頭の犬は会った瞬間からじゃれついた。ついでに息子は大きな大便を室内に漏らした。ボランティアの方は息子のほうを指さして“この子はあかんとれですよ”という言葉を残して引き揚げた。こうして2頭の犬が我が家にやってきた。

* * *

母親を“そら”と名付けた。すると“そらまめ”という連想により息子には“まめ”が候補となった。座りをよくするため“まめのすけ”と命名された。仕事柄米国本社からの出張者を日本の名所旧跡に案内することがある。後日犬達も車で同行した際、スカイとビーンズであることはわかったが、“のすけ”は何だ、という問いに“サムライのような響きになるのだよ”と教えてあげた。米国人は“そうか”と感心していた。

まめのすけが“あかんとれ”であることはほとんど判明する。そらと一緒にあれば他の犬に対して強気で向かっていくが、そらと一緒に散歩できない時には下を向いたまま目を合

わせることすらできない。どこがサムライか。“あかんとれ”と言われても仕方あるまい。

心が通うようになるまで1年近くかかった。力の強い犬が言うことを聞かないため当初はしばしば途方に暮れた。妻にとっては尚更だろう。大型犬のそらまめが小型犬に対しても無言で力強く向かっていく様はまさに荒くれ者である。鉢合わせると回れ右で逃げていく人が現れ始めた。保険所に通報される恐れが現実的となりトレーニングを受けさせた。

トレーニングはまめのすけにとってストレスだったのだろう、抜け毛が始まり首から腹にかけてツルツルになってしまった。それにしても何とお金のかかる犬達であることか。トレーニングに抜け毛治療、自然豊かな場所に行けばそらは蛇に噛まれ顔面を腫らし意識朦朧となり、まめのすけは釣り針が唇に刺さったりする。そのたびに獣医さんに通う。

* * *

夕飯後一緒にくつろぎながら安らかな寝顔を見ながら時々思う。震災、飼い主との別れ、子連れでの放浪の末の保護、保護施設での生活という過酷な時を経てよくぞ我が家にやってきた、と。そらは“荒くれ者”から“お転婆さん”くらいに落ち着いた。まめのすけの後ろ足の具合は一進一退を繰り返す。時々大便の最中踏ん張りきれず横倒しになる。おかしいやら悲しいやら不思議な気持ちになる。癲癇は一度も起きていない。



常に本業をベースとした 絶えざる技術革新

明和ゴム工業は、技術革新を一貫したテーマとして掲げ、印刷・新聞用ゴムロールをはじめとする多彩な製品・サービスを通じて情報化社会の発展を支援してまいりました。その60年を超える歴史は、情報技術の進化と同時に革新の連続でしたが、ものづくりに対するこだわりの姿勢は創業以来まったく変わっておりません。独創性の追及も、徹底した品質管理体制も、そして絶えざる技術革新もすべてはお客様にとって価値あるものを提供したいというこだわりを出発点としております。かつて印刷技術が情報の可能性に翼を与えたように、明和の提供する製品・サービスが、人と社会、そしてお客様の発展に大きく

貢献できるよう、私たちは今後とも努力と研鑽を重ねていく所存です。

* * *

かつてない環境変化の中で、製品や技術のあり方が問われ、情報化の進展や価値観の急速な多様化により、そうした時代の企業に求められていることは何か…

材料のリサイクル研究や環境への負荷の少ない製品の開発、生産工程での省エネ対策、人が働きやすい環境・職場づくりなどリサイクル対応の循環型社会、あるいは高度情報化社会の実現に微力ながら貢献して参ります。

また、新聞業界においても、軽量化『CFRP』を開発し20年余を過ぎ現在の最新高速輪転機の標準ロールとして採用頂いております。明和ゴム工業は、新聞業界の更なる発展と様々なニーズに応える新製品開発を推進して参ります。



明和ゴム工業(株)

70周年に向けて

日本新聞インキは日本唯一の新聞インキ専業メーカーとして全国の新聞社、及び新聞製作会社へインキや製作資材を納入しています。

24時間運転可能な全自動システムを持つ、三重県の中部工場と首都圏に近い神奈川県川崎市に立地する東京工場の2工場を生産拠点とし、札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、北九州の支店・営業所を軸にお客様へ迅速に高品質な製品を安定供給出来る体制を整えています。

* * *

新聞製作も多くの変遷をたどり、印刷方式が凸輪印刷からオフセット印刷へと変化して行くのに伴い、周辺緒資材も刷版のCTP化、減斤紙や高精細スクリーン印刷の導入等、

環境を配慮した技術革新が進んでいます。

これらに対応するべく、高濃度インキ(グランツシリーズ)をはじめとして、高品質インキ(VEGA-MXシリーズ)や湿し水(ドンエッチシリーズ)を供給させて頂いていますが、今後も新たな製品の開発に取り組んで行く所存です。

* * *

来年2014年10月に、弊社は創立70周年を迎えます。太平洋戦争のさなか戦況及び原材料事情の厳しい中、全国の新聞48社総意のもとに設立された意義を再認識し、創業以来のモットーである「新聞とともに」の言葉と、現在のスローガンである「Q(品質)U(顧客)E(環境)S(迅速)T(信頼)」の精神で、今後も業界の発展、活性化に微力ながら努めて行きたいと考えています。

NISSIN 日本新聞インキ(株)

基本方針：お客様中心主義

コニカミノルタビジネスソリューションズは、お客様や販売店様のご満足に留まらず、感動を与える「プリントビジネスコンシェルジュ」を目指し、顧客満足度(CS) No.1企業となるべく、日々取り組んでおります。

とりわけ、新聞業界に対しては、環境に配慮したケミカルレスCTPプレート「BLUE EARTH」を以て、お客様のベネフィットである「メンテナンス作業の低減」と、企業の社会貢献機会となる「廃液量の削減による環境保全」をご提供させていただいております。

昨年開催された「新聞製作技術展 JANPS2012」でもご紹介させていただきましたが、新聞社における「BLUE EARTH」の実運用も始まっております。今後、新聞印刷の国内標準CTPシステムを目指し一層の努力

を払ってまいります。

一方、デジタル化の進む商業印刷分野においては、プロ向けの品質・生産性を誇る、国内シェアトップのオンデマンド印刷システム「bizhub PRESS」シリーズをはじめ、様々なインクジェットデバイスに対応する、ハイクオリティインクジェットプルーフコントローラ「Falbard AQUA」や、標準光下での色管理を可能とする蛍光分光濃度計「FD-5/7」など各種製品を取り揃えております。

また、こうしたハードウェアを日々安心してお使いいただく上で、高度な技術サポートを提供する体制を築くとともに、各種コンサルティング(増販増客、トータルコスト最適化、等)により、お客様のお仕事を、あらゆる面から支援させていただいております。こうした様々なソリューションを活かし、今後とも業界の発展に寄与してまいります。



コニカミノルタ ビジネスソリューションズ株式会社

信頼性は即戦力です

弊社は明年、創業95周年を迎え新たな出発を期しております。先駆けること昨年11月に行われたJANPS 2012に宛名付小束作成装置を展示、実機運転を行い好評を博しました。これは手作業に頼ることの多い端数束作成作業の自動化を目指し、宛名札添付装置を組み込んだ小束作成装置を開発、発表しました。早速、数社からのお問い合わせを頂く中でこの度、中国印刷大野工場よりご注文を賜り納入、翌日より生産稼働に移行しお使いいただいております。

1部からの端数束を正確かつ高速で作成し宛名札を添付します。宛名札情報はSDカード又は、上位宛名システムにオンラインで接続して読み込みます。その上ペラ紙専用リーダーを組み込めばタブロイド4頁のチラシ

の広報紙などさらに多種の媒体に対応でき生産性向上、自動化、省力化に貢献できます。正確な紙送りと確実な宛名添付のこの装置「信頼性は即戦力です」のキャッチコピーでスマートなデザイン、シンプルな操作性を備えた実戦機として実証済みです。

宛名札添付部も改良、東に同期したカット紙に印字して損紙を削減、確実に添付します。また軽量で、キャスター付きのため狭いスペースでも自由なレイアウトでセッティングが可能です。社名を改め5年が経過、引き続き給紙設備から発送機器まで一連の、総合システムメーカーとして皆様のご要望を形にし新聞業界の発展に貢献していく所存です。

創業100周年に向け、新たな決意でサービスに取り組んでまいります。今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

KKS (株) KKS
TKS GROUP

米国PRINT13とNewsweb社にみるデジタル印刷の最新トレンド

(有)メディアテクノス代表取締役 井上秋男 (JAGAT客員研究員)

世界4大国際印刷総合機材展の一つ「PRINT13」は9月8日～12日までの5日間、米国シカゴのマコーミックプレース南ホールで開催された。また、会期中に東京機械製作所製新聞デジタル印刷機「TKSJETLEADER1500」を導入したシカゴの新聞印刷企業Newsweb社のオープンハウスも開かれ、1年ぶりに視察したので合わせてレポートしたい。

PRINT13

■開催状況

4年ぶりに「Innovate、Integrate、Communicate (革新、統合、伝達)」をテーマに開かれ、「CPP EXPO (Converting & Package Printing Expo)」も同時開催された。出展社約661社、来場者は24,695人、70以上のセミナーと60以上のイベントにより盛会となったが、全体的に前回(2009年)より規模は縮小した。背景として、デジタル印刷の普及拡大により、▽Heidelberg、Agfa、大日本スクリーン製造などビッグネームの出展見合わせ▽オフセット印刷機の実稼働は小森コーポレーションのみで、他社はパネル・ビデオ紹介▽出展社は新開発・新技術よりも販売製品を紹介するなど、PRINT13は従来と様変わりした「デジタル時代の印刷総合ソリューション展」となった。



PRINT13会場風景

■全体トレンド

昨年のdrupa2012の流れを受け、出展規模はデジタル印刷機ベンダーが上位を占め「All Digital PRINT13」となった。出展各社は印刷業界の取り巻く環境変化に対応して、「従来の印刷物出力」から「印刷物の付加価値提供」をメインに、デジタル印刷機とITソリューションや後加工機との連携により様々なビジネスモデルも紹介した。また、デジタル印刷の出展分野も商業から出版、軟包装・シールラベル、紙器パッケージ、サイン&ディスプレイに拡大し、中でもインクジェット(以下IJ)デジタル印刷機の多彩な展開に注目が集まった。オフセット印刷機の実稼働は小森コーポレーション1社となったが、あくまでも展示会の出展であり、当分はオフセット時代は続くと思われる。しかし、デジタル王国アメリカの意外と早い「パラダイムシフト」も見えてきた展示会となった。

■分野別出展状況

①商業・出版印刷：drupa2012で発表や参考出品されたIJデジタル印刷機が実用化され初出展が相次いだ。コニカミノルタと小森コーポレーションは「B2サイズ枚葉機KM-1/IS29」、富士フイルムは「B2サイズ枚葉機Jet-Press720とロール機JetPress540W」、Xeroxは今年2月に買収したImpika製ロール機「iPrint Compact」を出展。キャノンは「B3サイズ枚葉機Niagara」のコンセプトを紹介した。トナーデジタル印刷機は、キャノン、富士フイルム、リコー、コニカミノルタ、Xerox、HPなどの主要ベンダーから「生産性向上、オフセットライクの高品質化、IT・後加工機連携」を実現した最新機器が一斉に出展され、具体的なビジネスモデルとともに付加価値拡大をPRした。出展規模、出展内容

などわが国ベンダーの活躍も話題となった

②新聞印刷：会場内に「News Print」コーナーが設けられ、新聞オフセット輪転機はじめCTP、ワークフロー、乾燥機、輪転機制御、画像処理、発送機ベンダーなど約30社が出展した。米国新聞不況により新聞オフセット輪転機の新規導入が減少したことで、各ベンダーの出展はパネル・ビデオによる最新機器や導入事例紹介と商談コーナーがメインとなった。東京機械製作所USAは新聞デジタル印刷機TKSJETLEADER1500の導入事例と印刷サンプル、三菱重工USAは新聞オフセット輪転機DIAMONDシリーズ、KBAはコンパクト新聞オフセット輪転機Commander CLとデジタル印刷機RotaJET76及び新聞広告の付加価値印刷事例、GOSS Internationalは新製品の半裁機Magnam Compactによる新聞、出版、セミコマercial印刷と自動版替装置の出展、manrolandはCOLORMAN e:lineを各々紹介した。富士フイルムは新聞向けCTP、プレート、廃液削減装置をパネルと実機で紹介した。

③ワイドフォーマット印刷：サイン&ディスプレイ向けワイドフォーマットプリンタは、キヤノン、富士フイルム、リコー、エプソン、ミマキ、Mutoh、HP、EFI、Xanteが出展。共通ブースとして「The Inkjet Candy Store」には、各メーカーからサンプルと実機が展示された。大サイズ化、生産性向上、高解像度、厚紙対応、多色化、環境対応の実現と用途別機種が多数紹介され花盛りとなった。

④ラベル・シール、パッケージ印刷：CPP展の同時開催や多品種小ロット化、レーザー後加工機の開発進展などを背景に各ベンダーから新製品が数多く出展され賑わった。ラベル・シールでは富士フイルムは新製品GRAPHIUM、サカタインクスの現地法人INXはLEDUV機NW140を初出展しKomoriAmericaによる販売を発表。エプソンとコニカミノルタはサンプルと実演、HPはIndigo20000の

サンプル展示、ColorDyneはmemjetヘッド搭載機とLasXIndustries社のレーザー後加工機との連携、Xanteはmemjetヘッド搭載機によるパッケージ印刷を実演した。

⑤後加工機：デジタル印刷の普及拡大に伴い、インラインや多機能化した後加工機がホリゾン、デュプロ、HUNKELER、MÜLLER-MARTINI、Kern、LASERMAX ROLL、C.P.BOURGから最新機器が出展され、製本、裁断、スタッカー、パンチ、ミシン、封入封緘などを実演した。ホリゾンはサイズ、厚さ、部数のバリエーション可能な「スマートバインディングシステム」とB2サイズ向け後加工機「スマートスタッカー」を初出展した。SCODIXやMGIから印刷物の付加価値向上としてUV・ニスコーティングによる3D印刷が紹介され話題となった。

⑥印刷ITソリューション進展：デジタル印刷機とともにPRINT13のハイライトとなった。米国ではネット・モバイルなどを活用したICTの大波が印刷界にも押し寄せ、従来の印刷会社中心のクローズな業態から、顧客、印刷会社、IT企業を連携したオープン&オンラインソリューションが進展した。主要デジタル印刷機ベンダーはじめXMPie、enfocus、avanti、CGS、GMG、ESKOなどの印刷ITベンダーやベンチャー企業から、Web to Print、PSP（プリントサービスプロバイダー）、カラーマネージメント、品質管理、統合ワークフロー、受注自動化、MIS統合、印刷マーケティング、マルチチャンネル配信などの様々な印刷ITソリューションが出展され盛況となった。また、情報処理業界で導入進展しているクラウド活用も紹介され、印刷会社における「売上拡大、コスト削減・納期短縮、見える化、ブランド・サービス・柔軟性向上」などのメリットをPRした。

■セッション、セミナー

出展社、出展面積の減少に伴いセッション、セミナーが数多く開かれ展示会とともに賑わ

った。新聞印刷関連では、米国の非営利団体ING（国際新聞グループ）は9月7日にセッションを開催し、「新聞社は新聞産業の成長拡大への取り組み」、「ベンダーは新製品、新技術」を紹介した。講演したダウ・ジョーンズ社幹部は「昨年の東京機械製作所伊賀テクノセンターでのウォール・ストリート・ジャーナル アジア版の1年間のテスト印刷終了後も検討を進めている。インクジェット印刷はダウ・ジョーンズの将来を握っている」と述べた。また、米国の新聞業界誌NEWS & TECH主催のセミナーが8日開かれ、「新聞ブランドを印刷強化で維持」をテーマに、新聞社、関連企業から最近の取り組みが報告された。

新聞デジタル印刷

■Newsweb社オープンハウス

PRINT13ではロールIJデジタル印刷機の出展は商業・出版印刷が主体となり、新聞デジタル印刷の実演はなかった。このためNewsweb社はPRINT13会期中にオープンハウスを開催し、日本や米国関係者が新社屋にて新聞デジタル印刷を視察した。同社は昨年10月からTK-SJETLEADER1500（以下JETLEADER）を導入移行し、今年初めから新聞デジタル印刷を本格化した。現在、新社屋を建設中で来年2月に2台目を稼働させ取り組みを強化拡充する。日本の視察者から「スピード、品質とも予想以上。特に新聞折りを一貫して行う後加工機が素晴らしい」とコメントがあった。



Newsweb社オープンハウス

■Rodd Winscott社長の講演

9月9日に水性顔料分散液・着色剤大手のCABOT社主催のセミナー「Cabot Inkjet Colorants」がシカゴ市内のホテルで開かれた。デジタル印刷の調査コンサル会社infoTrends幹部とともにNewsweb社Printing Division社長Rodd Winscott氏による講演とQ&Aを行った。要旨は次の通り。▽2012年10月のGraph-Expo会期中のイベントでJETLEADERの世界1号機導入を紹介し、今年1月から本稼働した。日刊紙2種、週刊紙15種含め、これまでに23タイトルをJETLEADERで印刷した。大きなトラブルもなく、当初の期待を上回っている。現在の担当者はプリプレスと発送関係の2人。メーカー推奨用紙もあるが、オフセット輪転機用紙をJETLEADERで使えるようにカラーマネージメントを調整し使用している。▽導入メリットとして小ロット印刷で損紙が大幅に削減した。懸念していたインキコストは最適化プロセスにより使用量を削減した。今後、IJデジタル印刷機の普及やインキの認証銘柄が増えれば、インキコストは低下する傾向にある。IJ機はオフ輪と比べ、カラーページ数の制限がなく、クライアントの要求に応じて必要ページをカラー化することも可能。現有のオフ輪に比べ、1台で5セクションまで可能となり顧客要求に対応している。オフ輪優位と思われがちな7000部程度の仕事でもJETLEADERで印刷することもある。▽今後の展開として2台目導入によりデジタル印刷の比率を17～22%まで上げたい。2台目はバリアブル折り機が装備され紙面サイズの制約が無くなるので、仕事の幅が益々広がることを期待している。

以上、PRINT13とNewsweb社の概要を紹介した。米国ではデジタルメディア時代に適応した、新聞・商業印刷が進展していることが伺え有意義な視察となった。

第111回技術懇談会記

ANA機体メンテナンスセンター見学

9月13日、東京羽田のANA機体メンテナンスセンターの見学会が開催され、会員社と事務局合わせて18名が参加しました。まだ残暑が厳しく、最寄りのモノレール新整備場駅から徒歩15分の道のりを歩いて辿り着く頃には汗だくでした。

まずは涼しいプレゼンルームに案内され、ANAの概要についてのビデオを30分程鑑賞した後、整備場を見学させて頂きました。日本ヘリコプター輸送(株)として2機のヘリコプターで事業を開始したANAも、現在では従業員約14,000人、売上高1.4兆円の巨大な航空会社です。飛行機の運航は予約受付から空港での各種地上業務、飛行時の安全運行と客室サービスまで、顧客との接点およびチェックポイントが膨大に発生します。このためANA様では整備、グランドスタッフ、CA等が常に意思疎通のミーティングを行い、安全とCS向上に努めている点が印象に残りました。



いよいよ整備場見学へ巨大な格納庫へ移動しました。広さは23,000㎡で東京ドーム1.8倍分の大きさです。この中に航空機5機が収容でき、飛行時間に応じた整備を24時間体制で行っています。整備にかかる時間も一晩(A整備)、1週間(C整備)、数か月(HMV)と段階があります。整備機材、工具類が多数ある

との事でしたが、整備場内は非常に整然としており、しっかりした管理体制が敷かれていると感じました。

見学後の懇親会は会員と事務局のみの参加で実施しましたが、同じく工場設備を持つ会員社でもANA整備場のお手本になる点が話題になりました。最後になりますが、団体での見学を受け入れて頂いたANA様に心より御礼を申し上げます。

(東芝ソリューション 月野 浩記)

第66回新聞大会、 鹿児島市で開く

第66回新聞大会が10月16日(水)鹿児島市で開かれ、消費税に関する決議が採択された。来年4月の8%への引き上げの後、再来年2015年の10%時に新聞に軽減税率5%適用を目指すというもの。消費税引き上げ問題はその後のパネルディスカッションでも論議され、各社首脳が見解や対応を述べあった。

同日は新聞協会技術部門受賞の信濃毎日新聞「新印刷空調システムの実用化」などの授賞式も行われた。大会参加者は482名で台風26号の影響で26日午前の羽田発着便が欠航、30名ほどが鹿児島に入ることが出来なかった。CONPT評議員らの参加も6名予定していたが、芝会長を含む2名は出席を断念した。

来年の新聞大会は新潟市で10月15日(水)に開かれる予定。World Publishing Expo2014が10月13日～15日と同時期に開催される。

第112回技術懇談会記

CONPT-TOUR報告会開く

第112回技術懇談会は11月1日(金)午後、CONPT-TOUR報告会としてプレスセンター10階のレストラン「アラスカ」で開かれた。新

聞社・新聞協会関係21社37人、CONPT関係19社41人の計40社78人が出席。「上流下流ともデジタル」と銘打ったツアーの報告会とあって出席者も多く盛況をみせた。

ツアー団長を務めた内生孝史氏(三菱重工印刷紙工機械)の全体報告を皮切りに、黒澤勇氏(共同通信)がWPE (IFRA展)の内容と二つの新聞社の上流工程を、川内圭介氏(日経)は視察工場の概要とデジタル印刷の活用例を、最後に青山浩士氏(東京機械)がデジタル印刷の現状と見通しを報告した。



聴衆78人と大盛況

引き続き懇親会に移り、冒頭芝則之会長が会の盛況に謝意を述べた後、出席者は酒杯を手に懇談、宮本寿昭協会技術委員長(日経)の中締めで挨拶お開きとなった。なお、報告会の司会進行は村松哲クラブ委員長、懇親会は平井泰之同副委員長が当たった。

会員消息

■所在地変更

*株金陽社(9月24日付)

(〒136-0082)

江東区新木場1-1-1

王子木材緑化(株)ビル1階

TEL: 03-3522-3600

FAX: 03-3522-3650

*東芝ソリューション(株)(11月25日付)

(〒212-8585)

川崎市幸区堀川町72番34号

スマートコミュニティーセンター15階

TEL: 044-331-1096

FAX: 044-548-9524

新着資料

(国内)

*日本新聞協会“新聞技術” No.225

“NIEニュース”第73号、経営リポート秋号

*富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ “FGひろば” Vol.156

*三菱重工業“三菱重工グラフ” 173

(海外)

*WAN-IFRA “IFRA Magazine” 9~10月号

CONPT 日誌

9月10日(火)クラブ委員会(出席11名)

9月12日(木)企画委員会(出席7名)

9月13日(金)第111回技術懇談会

(ANA機体メンテナンスセンター見学&懇親会、18名参加)

9月17日(火)広報委員会(出席7名)

9月18日(水) CONPT TOUR旅行説明会(於日本新聞協会8階会議室 出席27名)

9月19日(木)評議員会(出席6名)

10月6日(日) CONPT TOUR2013 出発

10月12日(土) CONPT TOUR2013 帰国

10月16日(水)第66回新聞大会(於鹿児島、4名参加)

11月1日(金)第112回技術懇談会

- CONPT TOUR2013視察報告会&懇親会-(於レストラン・アラスカ、78名参加)

11月12日(火)クラブ委員会(出席6名)

11月14日(木)企画委員会(出席6名)

11月19日(火)広報委員会(出席8名)

11月20日(水)評議員会(出席8名)